

長期戦略:テーマ 「個別研究の活性化」

提出日 2022年 8月 24日

担当部署

II.実施計画帳票

長期戦略テーマの責任者 (統轄部署)	土井研究推進社会連携機構長 (研究推進社会連携機構)	実施計画の 担当部署	研究推進社会連携機構
-----------------------	-------------------------------	---------------	------------

1. 実施計画

実施計画(タイトル)	取組開始	達成状況 確認年度	学部・研究科での 取組み有/無	帳票
3-(1)-③ 研究実績を評価する仕組みの構築	2019年度	2024年度	必要なし	不要
<p>内容</p> <p>日々多様な価値観のもとで実施されている本学の研究活動を網羅的に評価する仕組みを構築することは難しい。しかし、限られた資源を機械的に均等配分することは、必要とされる資源が適切に配分されないという問題を常に内包する。本実施計画項目で検討する「研究実績の評価」とは、長期戦略で定められた指標の達成を目指した特定の価値観に基づく学内資源の配分を目的とするものであり、研究の本質的な優劣を決定するものではない。その一方で過度に狭い評価の視点とならないよう留意が必要である。</p> <p>(2019年度)他大学の事例収集 (2020年度)他大学の事例を参考とし、論文産出や科研費獲得、学外資金導入実績、研究発表、受賞歴等の評価要素を検討する (2021年度)各評価要素におけるデータの収集方法の整備・制度化を検討・実施する。 (同)収集データの分析は「実施計画 3-(1)-④研究力分析ツールの活用方法の検討」と連動し、統合可能性を検討する。</p>				
進捗状況を測る指標	指標名	定義・算式		
指標1	本学独自の研究実績評価システムが構築できたか	長期戦略の指標達成を主眼に置いた研究実績評価体制が構築されたか否か		

目標1<指標1> 本学独自の研究実績評価システムが構築できたか

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
目標	他大学の事例収集	評価要素の検討・策定	各評価要素に応じたデータの収集・分析体制の構築	導入・実施 その他の要素	実施・検証	実施・検証
実績	2大学のヒアリングを実施 (岐阜大学、立命館大学)	論文、外部資金等の評価要素について検討実施	外部資金・論文等の情報の収集・整理が可能となった。			

2. ロードマップ

		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
本学独自の研究実績評価システムの構築	策定段階	他大学情報収集	評価要素の検討・策定	各評価要素に応じたデータの収集・分析体制の構築	導入・実施	実施
	2023 年 3 月 末段階	-	-	-	-	実施・検証
		2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	-
	策定段階	実施	実施	実施	実施	
	2023 年 3 月 末段階	実施・検証				

3. 費用計画・人員計画

【費用・人員を必要とする理由】

非公開

経費 単位:万円	2022 年度 承認	2023 年度 承認	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	左記以降
----------	------------	------------	---------	---------	---------	---------	------

非公開

人員・人件費 単位:万円	2022 年度 承認						
--------------	------------	--	--	--	--	--	--

非公開

4. 進捗状況・得られた成果

2019年度	【指標1】研究実績の評価を行うためには、研究者の活動に関する幅広い情報を収集することが第一であり、2大学のヒアリングを行った。また、実施計画帳票「3-(1)-④研究力分析ツールの活用方法の検討」を通じてそのツールの構築を進める一方で、人間文化研究機構が進めている文系研究者の評価体系構築についての情報収集を行った。これらを今後の活動に活かしていきたい。
2020年度	実施計画帳票「3-(1)-④研究力分析ツールの活用方法の検討」で構築中の関西学院版「戦略的統合データベース」を用いて各種分析を行った。併せて、エルゼビア社の Scival を用いた分析事例も重ねている。その中で特定の目的（例：外部資金獲得）を設定した場合の分析精度については向上を続けている。こうした強みについては今後も継続して強化していきたい。
2021年度	昨年度と同様に関西学院版「戦略的統合データベース」を補強するデータ整理を進めた。科研費の採否情報だけでなく、受託・学外共同研究の実施状況を追加し、研究者の幅広い活動をカバーするデータ分析が可能となった。これと Scival を組み合わせることで、一部の研究助成金の大学推薦候補者を選定した。
2022年度	
2023年度	
2024年度	

5. 今後の課題及び方向性

2019年度	本項目における評価は、学内資源の配分が目的となっている。実施計画帳票 3-(1)-②で示したように、限りある学内資源の投資が消費に転化することを避けるという意図から、資源配分は過去への報償ではなく未来への投資であると規定する必要がある。従って、研究実績の評価及び分析のためには、当該研究が獲得資源の拡大・研究成果の質的向上につながるかどうかの方向性・可能性の把握（技術的な意味合いを含めて）に努めることが重要である。
2020年度	評価要素の検討・策定にあたっては、各研究の優劣を評価するものではないことに注意しなければならない。長期戦略の指標達成を主眼に置き、研究者の理解が得られる評価の仕組みを構築する必要がある。
2021年度	研究者個々の研究実績を包括的に評価する仕組みの構築は非常に難しく、どのような視点を用いても一面的な序列になる。従って、「3-(1)-④研究力分析ツールの活用方法の検討」で構築したツールの有効活用方法としては、個別局面での参考情報とすることが最善であると考えられる。従って、本帳票についてはその目指す事柄につき抜本的な検討が必要である。
2022年度	研究者個々の研究実績を包括的に評価する仕組みの構築が難しい状況に変わりはなく、現在構築した「戦略的統合データベース」の効果的な使い方は、研究成果における個別局面での参考情報提供である。表彰・報酬制度に関しても選定には何らかの一律基準の要素を設ける必要がある。同様の問題を孕んでいる。この点に関しては研究場所の措置等のインセンティブ付与を含め検討を続けていく。また、自然科学系研究者の数が少ない本学において高額な費用が発生する Scival の継続契約については整理が必要。本ツールを導入した学長室が大学ランキングに関する業務で使用している等、研究のみならず総合的な視点でツールの評価が必要だと思われる。
2023年度	

2024 年度	
---------	--

6. 学院総合企画会議の基本方針

2019 年度	—
2020 年度	—
2021 年度	研究実績を測るツールとして SciVal の継続購入を認めます。
2022 年度	研究実績を測るツールとして SciVal の継続利用を認めます。
2023 年度	
2024 年度	

7. Total Review の結果

【フェーズ I (2019~2021)】

レビュー結果	可 否	備 考 (継続:「フェーズ II に向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
<ul style="list-style-type: none"> 研究実績の評価に関する他大学への調査を実施し、情報収集を行った。 ただし、研究者個々の研究実績を評価する仕組みの構築は非常に難しく、抜本的な見直しも含めた検討が必要である。 	<input checked="" type="checkbox"/> 継続 <ul style="list-style-type: none"> 廃止 	<ul style="list-style-type: none"> 優れた研究成果に対する学内表彰・報酬の導入の検討

【フェーズ II (2022~2024)】

レビュー結果	可 否	備 考 (継続:「フェーズ II に向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
	<input type="checkbox"/> 継続 <ul style="list-style-type: none"> 廃止 	